

財 団 季 報

トピック

世界高血圧専門家会議

心臓移植

「知っておきたい循環器病あれこれ」
パンフレット紹介



細胞たちが交わす言葉の解明

—21世紀に向けた循環器病研究の一側面—

国立循環器病センター研究所 名誉所長 **松尾 壽之**



さまざまに分化した臓器の集合体であるわれわれのからだは、一つのシステムとして健全にはたらくために、すべての臓器（言い換えればすべての細胞）は、互いに情報を交換しあい、対話しながらそれぞれの機能を巧みにコントロールしています。環境の変化を認識した細胞は、その情報をホルモンや神経伝達物質（リガンドと総称します。）に託し、それは他の細胞表面のレセプター（受容体）と結合します。こうして、細胞から細胞へと情報を伝え、内部環境の恒常性を保とうとするのです。

ですから、ホルモンなどのリガンドは細胞が話しかける言葉であり、レセプターはその言葉を聞き分ける耳にたとえられます。全身に張り巡らされた無数のリガンド・レセプター相互作用の網目によって、情報が過不足なく伝達され、すべての細胞の機能は調節され、われわれの体はバランスよく健全に働くのです。この情報伝達の仕組みが少しでも乱れるとしばしば致命的な病気を引き起こします。われわれの体にとって、これほど重大な仕組みであるにもかかわらず、細胞たちが交わす言葉にはまだまだ知られていないものがかなりあるようです。私たちの研究グループは、長年の間、細胞が発信する未発見の言葉を発掘する仕事を続けてきました。新しく見つけた言葉を手がかりにして、細胞たちが交わす言葉による情報伝達の新しい仕組みを見つけだし、いわば細胞言語学の新しい側面を掘り起こしたいというのが、わたしたちの主な目的であります。

わたしたちの研究成果の一つは、ナトリウム利尿ペプチドと総称される3種類のホルモン；ANP、BNP、CNPの3兄弟の発見です。ANPとBNPは2つの心臓から発信される言葉で、血管や腎臓に血圧を下げるように話しかけます。腎臓では血液内の余分な塩分や水分を尿として排出

すると同時に、血管は拡張し、その結果、血圧を低下させます。また、血圧を上げる仕組みの一つであるレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系を抑制することによって、血圧を下げる働きをします。これまで、血液を送り出すポンプとだけ考えられていた心臓が、実は血圧を調節するホルモンを分泌し、心臓・腎臓・血管にまたがる新しい血圧調節機構が存在することが初めて明らかになったのです。

ANPはすでに急性心不全治療薬として厚生省の認可も受け、実際に使われています。BNPは、心疾患のすぐれた診断薬です。さらに、3番目の弟であるCNPは、心臓にはほとんどなく脳で働いているようです。飲水行動や食塩摂取を抑制して、行動的あるいは情動的に血圧を上昇させない働きをしています。一方、血管の内壁が傷つくと、修復機構が働いて血管内壁の細胞が増殖し、これがかえって、動脈硬化の進展につながります。このとき、CNPを投与すると、内壁の増殖を押さえ、血管の狭窄を防ぐこともわかってきました。このように、ホルモンは情報の伝達に関与するだけでなく、細胞の増殖や分化、あるいは遺伝子の発現調節に関わるなど多様な働きを示します。近代科学の進歩、特に医学関係では分子生物学の進歩によって、これまでの謎が続々と明らかになってきています。ヒトの遺伝子解析ですら数年のうちに完成するといわれています。しかし、われわれを取り巻く自然の謎のすべてが解き明かされるものではありません。血圧調節という人間にとって非常に基本的な問題でさえも、まだその全貌の10%ぐらいしかわかっていないのです。基礎医学および臨床医学両面にわたり、人間の健康と福祉のための着実な努力の積み重ねこそが、われわれの未来に明るい灯をともしのだと信じています。

表紙絵：ウィルヘルム・ボイエルマン作「血管の流れ」。

作者は1973年ベルリン生れ、心臓に関する詳細な図録をみて触発され、独自の芸術的イメージを展開した作品。

◇◇◇ 平成11年度事業の概要 ◇◇◇

第28回理事会および第12回評議員会で決定された平成11年度事業は次のとおり。

事業は概ね例年通りであるが、予防啓発活動としてのパンフレット発行事業の拡大が目玉。

(詳細は最終頁に紹介)

I. 研究助成事業 (8,702万円)

(1) 公募研究助成

A. 公募自由課題研究助成

全国公募による臨床・予防医学・疫学・基礎医学の中から10課題に対して研究助成を行う。

B. バイエル循環器病研究助成

学識経験者により研究テーマを「狭心症、心筋梗塞」と指定し、全国公募により4課題に対して研究助成を行う。

C. 循環器疾患看護研究助成

全国公募により循環器病の看護に関する10課題に対して研究助成を行う。

(2) 指定研究助成

A. 長期降圧薬治療評価研究

(継続GLANT-Study)

B. 高齢者高血圧に対する降圧薬治療の効果に関する研究 (第2JATE)

C. 脳卒中再発予防に関する国際共同研究 (PROGRESS)

D. ナトリウム利尿ペプチドに関する研究

E. 心臓移植拒絶反応の非観血的早期診断の確立に関する研究

F. 内皮依存性の血管機能の解明

G. 高血圧性肥大心における虚血性心筋傷害の予防に関する研究

II. 研究・研修者助成事業 (500万円)

(1) 国内外研修者助成

国内外において研修に派遣される者に対する助成

(2) 国際協同研究者助成

海外で開催される学会・協同研究に派遣される者に対する助成

III. 学会助成事業 (11,740万円)

(1) 第24回日本脳卒中学会

(2) 国際脳卒中学会リージョナルミーティング

(3) アジア太平洋動脈硬化学会1999年ワークショップ

(4) 第7回国際インターベンショナルラジオロジー・新血管造影シンポジウム、第28回日本血管造影・インターベンショナルラジオロジー学会総会ジョイントミーティング

(5) 第31回日本動脈硬化学会

(6) 第4回日本心臓血管麻酔学会

(7) 第13回日本エム・イー学会秋季大会

(8) 第20回国際心肺移植学会

(9) 第48回日本心臓病学会

(10) 第5回国際循環器病予防会議

IV. 予防啓発活動 (1,400万円)

(1) 学術活動支援

セミナー等の開催に対する助成

(2) パンフレット発行

循環器病の予防啓発パンフレットを発行し、自治体・企業・市民などへの配付。

《知っておきたい循環器病あれこれ》シリーズの発行

平成11年度研究助成対象者決まる

1. 公募自由課題研究助成

循環器病に関する臨床、予防、疫学、基礎の分野に対する自由課題の研究助成で、今年度は全国から66件の応募があり、5月28日開催の選考委員会において次の10名が選考された。

(1課題100万円)

鎌倉 史郎	国立循環器病センター 心臓血管内科・医長	心室の電気現象を反映する体表表面分画に関する研究
笹栗 俊之	国立循環器病センター研究所 バイオサイエンス部・室長	プロスタグランジンD2/J2代謝系による血管細胞の増殖・分化・死の制御に関する研究
佐田 政隆	東京大学医学部附属病院 循環器内科・医員	動脈硬化形成過程における血管内皮細胞上Fasリガンドの役割 -Fasリガンド欠損並びに恒常発現マウスを用いての検討-
七里 眞義	東京医科歯科大学医学部附属病院 第2内科・助手	家族性高コレステロール血症に対する新たな遺伝子治療
清水 渉	国立循環器病センター 心臓血管内科・医師	イオンチャネル病(先天性QT延長症候群、Brugada症候群)における心電図異常の細胞学的成因、頻脈性不整脈の発生機序および抗不整脈薬の有効性
坂東 興	国立循環器病センター 心臓血管外科・医長	新生児肺高血圧症のメカニズムとその予防に関する実験的研究
平田 恭信	東京大学医学部 循環器内科・講師	心不全患者の呼気ガス中の一酸化窒素排出量の、血中サイトカイン・神経体液性因子・運動耐容能との関係の検討
藤田 敏郎	東京大学医学部附属病院分院 内科・教授	食塩感受性高血圧の遺伝子診断に関する研究
堀内 正嗣	愛媛大学医学部 第1医化学・教授	アンジオテンシンIIタイプ2受容体に結合するアポストロースス関連シグナル伝達物質のクローニング及び心血管系における生理活性の解析
山田 充彦	国立循環器病センター研究所 心臓生理部・室長	CAMP信号体による心筋細胞のイオンチャネル制御機構の解析

2. バイエル循環器病研究助成

バイエル薬品株式会社から寄贈された基金による指定分野の研究助成であり、今年度は「狭心症、心筋梗塞」の分野で4名が選考された。(詳細は8頁)

(1課題250万円)

3. 循環器疾患研究助成

循環器病の看護に関する自由課題の研究助成で、今年度は6月8日開催の選考委員会で次の10課題が選考された。

(1課題20万円)

朝比奈 佳代	国立循環器病センター 5階西病棟・看護婦	肺高血圧をもった思春期の男児に対する看護 -プロスタサイクリン導入に向けて-
塩 早苗	国立循環器病センター 手術室・副看護婦長	手術室二交代制勤務を導入して -看護婦の意識および疲労状態の変化-
高田 幸千子	国立循環器病センター 8階東病棟・副看護婦長	慢性心疾患患者が求めるインフォームド・コンセントにおける看護婦の役割
中尾 砂織	国立循環器病センター 脳血管外科緊急治療科・看護婦	脳血管外科領域の終末期患者における乾燥予防ケアの効果
中村 直規	国立循環器病センター 乳幼児治療科・副看護士長	新生児、乳幼児における閉鎖式輸液回路の導入
三井 佐代子	国立循環器病センター ICU・看護婦長	国立循環器病センターにおける認定看護婦・士制度の構築-当センターの看護婦の制度導入に関する認識調査及び現任教育の教育内容の分析をする-
村田 淳子	国立南九州中央病院 ICU・看護婦	医療の効率化(システム改善)を目指した冠動脈バイパス術クリティカル・パスの導入
安田 由香	国立循環器病センター 6階東病棟・看護婦	標準予防策・感染経路別予防策に関する意識調査・第2報
藪下 真紀	国立循環器病センター 6階東病棟・看護婦	冠動脈-大動脈バイパス術後の上肢浮腫を軽減する方法の検討
吉田 活子	国立循環器病センター 緊急治療科(NCU)・看護婦	意識障害のある患者の経口摂取を可能と判断する因子についての調査 -意識レベルがジャパン・コマー・スケールにて2桁の患者を通して-

世界高血圧専門家会議の開催

世界高血圧専門家会議 (International Expert Meeting on Hypertension) が世界保健機構 (World Health Organization, WHO)、国際高血圧学会 (International Society of Hypertension, ISH)、循環器病研究振興財団の共催で平成10年9月28日から10月1日までの4日間福岡市で行われた。

この会議は4年毎に改訂されるWHO/ISHの高血圧ガイドライン作成を目的に開催され、世界各国からや50名の専門家が一同に会して最近の知見を報告し、討議を行った。

南米、アフリカなどからも代表者が参加し、世界のどの地域にも通用する高血圧管理のグローバルスタンダードの作成を目指したものである。健康管理システム、医療環境、経済事情、ライフスタイル、人種的ないし文化的基盤の大きく異なる各地域において実地に利用可能なバランスのとれたガイドラインが必要との認識に立ったものである。

しかし、目標は世界共通で、血圧とともに喫煙習慣、高コレステロール血症、糖尿病、肥満、運動不足など脳卒中や心臓血管病を起しやすくする諸要因(危険因子)の克服によってこれらの病気を予防するための原則には変わりがない。

血圧は日によりまたそのときの心身の状態によって変動し、変動の中も人によって一定していない。どのレベル以上を高血圧として管理の対象にするか(高血圧の定義)、また最近では血圧を家庭で測る人も増えており、それが病院で測る血圧とかなり違う場合もあるので、それにどう対応するのかを含め、血圧に関する重要な様々な問題が論じられた。

高血圧の管理・治療は血圧を下げるのが最終目標ではなくて、脳卒中や心臓血管病を予防するためのものである。高血圧の治療によってこれらの疾患が

どの程度減少したかを示す世界各地の研究成績を総括し、今後さらに効果を上げるための方策、血圧はどのレベルまで下げるべきか、生活習慣改善の重要性、各種降圧薬の選択とその使用規準、危険因子や既



23ヶ国から集まった専門家の熱心な討議

に脳卒中・心臓病の既往歴がある場合の血圧管理が重要課題となった。

また、妊娠と高血圧、超高齢者の高血圧、高血圧と痴呆、がんと高血圧、遺伝子と高血圧など近年ホットな課題が各論のセッションの中にとり上げられて、これまでの知見と将来の問題点が論じられた。

最終日は、管理・治療に不可欠なQOL (Quality of Life 生活の質)の問題と費用と便益効果の分析(Cost-Benefit Analysis)が経済面と医療の両面から論じられた。

この会議はガイドラインの作成にあたって従来にない規模で世界各地の情報を収集して行われた。その成果は本年初頭1999WHO/ISH高血圧ガイドラインとして公表され、広く世界に周知された。(J.of Hypertension, 1999; 17:151-83など)。

以下、血圧の測り方と高血圧の定義を紹介する。

血圧は動揺するので高血圧の診断は日を変えて繰り返し測った病院や診療所での血圧値が収縮期血圧(上の血圧)140mmHg、拡張期血圧90mmHg以上のものとする。しかし、正常血圧はそれぞれ130mmHg、85mmHg未満とし、130-139mmHg、85-89mmHgは正常高値、至適血圧はそれぞれが120mmHg、80mmHg未満とする。家庭で測る血圧(家庭血圧)は一般に病院で測る血圧より低く、収縮期血圧125mmHg、拡張期血圧80mmHgが病院血圧の140mmHg、90mmHgにほぼ相当する。

血圧の高さと同時に既述した危険因子や合併症の有無を調べて対処するが、危険因子を多くもつものほど血圧のコントロールを厳重にする。生活習慣の是正をまず行い、必要に応じて血圧降下薬を使用するが、ガイドラインはその基準を具体的に明示し、降圧の目標を収縮期血圧130mmHg、拡張期血圧85mmHgとする。治療は心臓病予防にも有効であるが、脳卒中予防効果の方がより著名である。

(写真は、読売新聞大阪本社提供)

**INTERNATIONAL
EXPERT MEETING ON
HYPERTENSION**

*Held under the Auspices of the
World Health Organization - International Society of Hypertension
Joint Liaison Committee on Hypertension
and of the Japan Cardiovascular Research Foundation*

Hotel Nikko Fukuoka
2-19-21 Hakata-ekimae
Hakata-ku, Fukuoka
814-0921 Japan
TEL: +81-92-482-1111 or 1114
FAX: +81-92-482-1198

Monday, 28th September - Thursday, 1st October 1998

国立循環器病センターで 心臓移植実施される

国立循環器病センター 副院長 **北村 惣一郎**



臓器移植法の成立から1年7、8ヶ月を経た本年5月及び6月に2名の心臓移植待機患者に条件の合致する提供者があり、永年待機して来た心臓移植手術を国立循環器病センターにて実施することが出来た。既に報道等で御存知の通り提供して下さったのは東京都と宮城県在住の方々と思われ、それぞれ慶応大学病院、古川市立病院を経てのものであった。紙面を借りて関連者各位に厚く御礼申し上げたい。この2例の経験を通じて私を感じた事を少々述べてみたい。

先ず、既に分かっていたことではあるが、脳死下の移植医療には実に莫大な数の人達の労力と協力が必要であり、その一人一人の協力なしには成立しないことを改めて実感した。これには提供者の尊い意志と御家族の決断に始まり、脳死判定における緻密な法律に順じた過程を経、臓器移植ネットワークが行動し、摘出班が出発し、臓器を頂く手術を行い、これを緊急に搬送し(いづれの場合もヘリコプター、チャータージェット機、パトカー先導の自動車等を使用)、移植病院となった国立循環器病センターに届けてもらうことが含まれている。これらの協力の多くを経費として支払うには多大の予算措置、或いは自己負担金が必要となることから心臓移植の普及と定着には早い時期の健康保険適用が必要となろうし、また、「臓器移植」推進財団の設立も望みたい。今回の搬送は東京都、宮城県からであったが、良好なドナー心の保存状態からみて、恐らく沖縄、北海道からでも許容時間内での搬送が可能と考えられる。

我が国での心臓移植は欧米から30年の遅れをと

ったが、その再開にあたってはこの間の臓器移植学の進歩を充分反映せしめ得た。これには手術手技(兩大静脈吻合法の採用)、術中心筋保護法(早目の逆行性冠灌流法の開始)、術後管理、特に最近進歩した免疫抑制剤の使用〔腎機能不全をもった患者に対するOKT-3(ムロモナブ)の使用、効能の良くなったミコフェノレートモフェチル(セルセプト)、腸管吸収性を改良したシクロスポリン(ネオーラル)等の使用〕、迅速な薬物血中濃度の測定、正確な心筋バイオプシーと拒絶反応の判定、感染症、特にサイトメガロウイルスに対するDNA、mRNA早期診断などが含まれる。国立循環器センターの2患者についてもこれら一連の流れが総長、病院長、運営部、心臓移植対策室、以下一団となつて的確に施行された。大阪大学病院の協力も得て、患者は順調に回復し、すでに両者とも退院している。現在使用している免疫抑制剤はいづれも高額であり、患者の一生にわたり必要なもので心臓移植を含めた移植全般に対して早期の保険適用を期待したい。

我が国で心臓移植が再開されたことは大変喜ばしく、また嬉しいことであるが、日本臓器移植ネットワークには20数名の心臓移植待機患者が登録されており、その人達を救命してゆくには我が国のドナー数の目標をさしあたり年間約20~30とする必要がある。国立循環器病センターは心臓移植実施施設であると共に臓器提供施設でもあり、脳死下の移植医療の定着に向けて取組みたいと思っている。今後とも御支援を賜わる様お願い申しあげる。

……心臓移植の時間的経過……

国立循環器病センターでは昭和63年2月「心臓移植準備に関する打ち合わせ会」を開催以来、歴代総長の指揮の下に全組織をあげて心臓移植にとりくむべく慎重かつ周到な準備が進められた。当財団としても、これを成功させるため、数次にわたる医療スタッフの海外派遣研修やシュミレーションの実施などに微力ながら支援を行ってきた。

国民的支持の下の心臓移植の再開は、当財団の設立に東奔西走された故曲直部前理事長の宿願であったがその実現を見ることなく他界された。ここに本年5月に施行された心臓移植の経過を循環器病センターのインターネットホームページから抜粋掲載して先生の霊に捧げる。(文責 財団)

5月12日

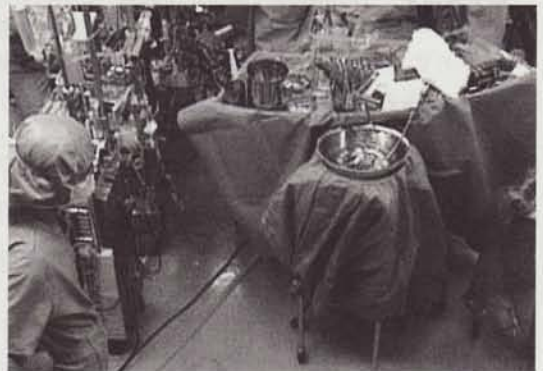
- 04:47 日本臓器移植ネットワークより、センターの心臓移植登録患者が第一候補者であるとの連絡があり、登録者の意志確認依頼あり。
- 05:50 入院中の患者に口答で説明。本人意志ありの回答を得る。ドナーの腫瘍についても説明。
- 06:00 ネットワークへ受諾する旨、連絡。
- 07:20 ダイレクト・クロスマッチのためレシピエント血液検体を航空貨物で発送。
- 08:30 本人・母に書面でインフォームドコンセント。
- 09:00 大阪大学との合同摘出チーム第一班センター出発。
- 11:20 摘出チーム第一班、慶應大学到着。
- 12:13 摘出チームより、血液クロスマッチ陰性と報告あり。
- 14:00 本人に、ドナーの腫瘍について再度説明し、移植を受ける意志を確認。
- 16:30 レシピエント手術室入室。
- 16:52 直視下でドナー心として適当であると連絡あり。
- 16:56 レシピエント麻酔開始。
- 17:40 ドナー心大動脈遮断。
- 18:11 レシピエント手術開始。
- 18:25 摘出チーム慶応大学出発。
- 19:58 摘出チームセンター到着、ドナー関係書類確認。
- 20:32 ドナー心をレシピエントに縫合開始。
- 21:26 血流再開(ドナー心虚血時間:3時間46分)
- 22:31 体外循環離脱

5月13日

- 03:30 手術終了
- 03:50 ICU入室
- 5月20日 ICUから一般病棟へ移送
- 7月16日 退院



摘出チーム(第1班)の出発



ドナー心手術室へ到着

レシピエント心摘出中の手術室



レシピエントをICUへ移送

バイエル循環器病研究助成

— 第6回研究発表会を宮崎で開催 —

去る6月25日、第6回バイエル循環器病研究助成の研究発表会が宮崎市のワールドコンベンションセンターで当財団主催およびバイエル薬品株式会社共催で開催された。

この研究助成は、少壮研究者の独創性または萌芽的研究に対して行われるもので、第6回は「脈管疾患—大動脈、末梢動脈、静脈の疾患（脳血管、冠血管を除く。）」のテーマで全国公募により課題を募集し、4課題が選考決定されていた。

研究発表は第31回日本動脈硬化学会のスケジュールに合わせ行われ、同学会会頭の住吉昭信宮崎医科大学教授の開会挨拶で始まり、当財団の常任理事でもある川島康生国立循環器病センター名誉総長の選考経過説明の後、下記の研究課題につき各演者の熱のこもった発表が行われた。

日本動脈硬化学会関係者各位のご理解とご協力により多数の学会員の参加があり盛会だった。

研究課題1：「Microfibrilの異常に起因する大動脈疾患の遺伝子診断、病態解明に関する研究」
青山 武（京都大学医学部循環病態学助手）

研究課題2：「神経堤細胞に由来する血管平滑筋分化のメカニズムと細胞特性に関する研究」
栗原裕基（東京大学医学部循環器内科助手）

研究課題3：「大動脈炎症候群 発症・進展の分子機構の解明—ストレス蛋白質・血清因子・DNA多型の検索を通じて—」
桑原敬介（大阪大学大学院医学系研究科情報伝達医学病態情報内科医員）

研究課題4：「Peripheral Vascular Disease における局所肝細胞増殖因子（HGF）の病態生理学的意義の解明と治療への応用」
森下竜一（大阪大学大学院医学系研究科遺伝子治療学助教授）

— 第7回研究助成対象者決まる —

第7回は「狭心症・心筋梗塞」のテーマで全国公募により課題を募集したところ38課題が申請され、選考委員会による厳正な審査の結果、約10倍の難関を突破して下記の4名の研究者への助成が決定された。

贈呈式は、去る7月22日豊中市の千里阪急ホテルで挙行政され、研究者は財団理事長をはじめ列席者から激励を受けた。

研究課題1：「酸化ストレスに対する防御とその破綻の冠攣縮性狭心症の発症機序における役割に関する研究」
久木山清貴（熊本大学医学部附属病院循環器内科・講師）

研究課題2：「心筋梗塞・狭心症における新規酸化LDL受容体の冠動脈における発現と可溶性LOX-1の血中濃度の検討」
久米典昭（京都大学大学院医学研究科成人・老年病病態学・講師）

研究課題3：「微少血管狭心症の病態の解明と治療法の検討」
毛利正博（九州大学医学部循環器内科・講師）

研究課題4：「新しいPTCA用多機能バルーンカテーテルの開発」
安田 聡（国立循環器病センター心臓血管内科・医員）



◆◆◆ 盛況だった脳血管外科サマーコース ◆◆◆

近時、脳外科分野の診断および治療技術の進歩は著しい。循環器病に関する最新の診断技術の普及促進と医療関係者の育成・研修は当財団の設立目的の大きな柱である。

一方、国立循環器病センターの脳神経外科部門は年間500例を超える最新技術による手術実績を有し、全国から見学や研修の希望が絶えない。



そこで、国立循環器病センター、三重大学、滋賀医科大学の脳外科関係者で構成される研究会と当財団は、若手脳外科医の脳血管障害の外科治療技術のレベルアップを目的として集中的に講義と実技の供覧を行う「脳血管外科サマーコース」を企画し、これを国立循環器病センターにおいて、去る7月19日から22日までの4日間のスケジュールで共催として実施した。

受講者は、当初15名程度と見込み公募したところ、近畿圏を中心として45名の申込みがあり、実施可能ぎりぎりの40名を対象とした。

研修内容、画像診断、直達手術、血管内手術についての講義と見学に加え、ハンズオン（ラットを用いた血管吻合の練習、脳血管内手術器材を実際に手に取り、ファントムを用いた模擬演習等）を組み合わせたプログラムで進められた。炎暑も加わって、熱気溢れる4日間であった。

日 時	内 容	日 時	内 容
7月19日（月）AM	挨拶 オリエンテーリング	7月21日（水）AM	供覧／直達手術（CEA）
PM	講義／直達手術（開頭・動脈瘤・CEA） 供覧／直達手術（動脈瘤neckclipping）	PM	講義／血管内手術（概説・動脈瘤） 講義／血管内手術（線溶療法・ステント）
7月20日（火）AM	講義／画像診断（脳血流） 講義／画像診断（MRI） 講義／血管内手術（概説・動脈瘤）	7月22日（木）AM	供覧／血管内手術（動脈瘤塞栓術）
PM	実技／血管内手術 実技／血管吻合	PM	供覧／血管内手術（stenting） 総括

告 知 版

当財団は、厚生省の平成10年度老人保健健康増進事業として国庫補助を受け「老人性痴呆予防のための新しいスクリーニング方法の開発」を進めてきましたが、去る8月15日平成11年度も同一テーマで開発をすすめるよう正式内示がありました。ついては、これを平成11年度事業（3頁）に追加します。なお、1月でその内容の解説を予定しています。

▷▷▷ 新理事と新評議員の顔ぶれ ◁◁◁

当財団では、理事と評議員の任期満了に伴い、去る3月16日開催の評議員会において新たに理事を選出した。

また、同時開催の理事会において、新たに評議員を選出するとともに、新理事の互選による会長、副会長、理事長および常任理事が決まった。

その後、経済団体の人事異動に伴う理事の退任等があり、去る8月10日開催の評議員会でさらに新理事を選出した。

新理事と新評議員は次のとおり。

〈理事〉

会 長	佐治 敬三	サントリー株式会社会長
副 会 長	秋山 喜久	社団法人関西経済連合会会長
	仁村 泰治	国立循環器病センター研究所名誉所長
理 事 長	尾前 照雄	国立循環器病センター名誉総長
常任理事	梅本 純正	武田薬品工業株式会社相談役
	大谷 藤郎	財団法人藤楓協会理事長
	川島 康生	国立循環器病センター名誉総長
	末次 彬	社会保険診療報酬支払基金理事長
	杉本 恒明	公立学校共済組合関東中央病院院長
理 事	青山 行雄	読売テレビ放送株式会社名誉会長
	井上 礼之	ダイキン工業株式会社社長
	稲盛 和夫	京都商工会議所会頭
	大西 隆	大西衣料株式会社会長
	大庭 浩	神戸商工会議所会頭
	岡田 善雄	（助）千里ライフサイエンス振興財団理事長
	奥井 功	積水ハウス株式会社社長
	小野田正愛	山之内製薬株式会社社長
	川勝 堅二	株式会社三和銀行相談役
	菊池 晴彦	国立循環器病センター総長
	小林 公平	阪急電鉄株式会社会長
	小林庄一郎	関西電力株式会社相談役
	田代 和	大阪商工会議所会頭
	坪井 栄孝	社団法人日本医師会会長
	眞崎 知生	国立循環器病センター研究所研究所長
	松尾 壽之	国立循環器病センター研究所名誉所長
	森 巨	日本医学会会長
	山口 武典	国立循環器病センター病院長
	吉川 弘之	日本学術会議会長
	領木新一郎	大阪ガス株式会社会長
監 事	井植 敏	三洋電機株式会社会長
	海保 孝	株式会社大和銀行頭取

〈評議員〉

医学界	飯村 攻	札幌医科大学名誉教授
	上島 弘嗣	滋賀医科大学教授
	江橋 節郎	岡崎国立共同研究機構生理研究所名誉教授
	大江 透	岡山大学医学部教授
	荻原 俊男	大阪大学医学部教授
	北川 定謙	埼玉県立大学長
	小塚 隆弘	大阪府立羽曳野病院名誉院長
	小町 喜男	大阪府立公衆衛生研究所名誉所長
	小柳 仁	東京女子医科大学教授
	篠山 重威	京都大学医学部教授
	内藤 泰顕	和歌山県立医科大学教授
	平盛 勝彦	岩手医科大学教授
	柗山幸志郎	琉球大学医学部教授
	藤田 毅	りんくう総合医療センター総長
	矢崎 義雄	国立国際医療センター病院長
	矢野 俊雄	大阪大学医学部名誉教授
	山本 章	兵庫医科大学客員教授
実業界	阿久津哲造	テルモ株式会社相談役
	石橋 伸康	大和ハウス工業株式会社社長
	稲畑 勝雄	稲畑産業株式会社会長
	宇野 郁夫	日本生命保険相互会社社長
	大林 芳郎	株式会社大林組会長
	岡本 常男	財団法人メンタルヘルス岡本記念財団理事長
	金森茂一郎	近畿日本鉄道株式会社会長
	鎌倉 昭雄	吉富製薬株式会社社長
	河村 喜典	三共株式会社社長
	久我 一郎	株式会社久我会長
	菅谷 定彦	日本経済新聞社前大阪本社代表
	鈴木 正	第一製薬株式会社社長
	内藤 晴夫	エーザイ株式会社社長
	廣瀬 哲雄	日本放送協会大阪放送局局長
	藤山 朗	藤沢薬品工業株式会社会長
	米倉 功	伊藤忠商事株式会社相談役
	W・プリシュケ	バイエル薬品工業株式会社社長
	ユージン・リー	シーメンス旭メディテック株式会社社長

◎◎◎ 第12回 循環器病チャリティゴルフ ◎◎◎

◇ ゴルフ大会

秋もようやく深まる気配の10月2日(土)、循環器病チャリティゴルフがよみうりカントリークラブで開催された。この大会は、読売テレビ、読売新聞大阪本社、報知新聞、読売ゴルフの主催ならびに厚生省をはじめ近畿圏の各自治体、各医師会の後援により循環器病の制圧、予防、啓発の資金作りのために関西の財界・医界を代表する方々が参加して行われるもので、今や関西での秋の風物詩の一つになっている。

今回は、第12回を迎え35組140名の方々が参加して日頃自慢の腕を競った。



◇ 講演会・表彰式・基金贈呈式

続いて10月4日(月)ホテルニューオータニ大阪において盛大に行われた。

川島康生国立循環器病センター名誉総長の記念講演「心臓移植と今後の問題点」に続いて表彰式に移り、杉浦信平厚生省生活習慣病対策室長から個人優勝者に厚生大臣杯が授与されたのをはじめ数々の特別賞や記念品が贈呈された。

最後に読売テレビの青山行雄名誉会長から尾前財団理事長にチャリティ基金が贈呈された。財団ではこの基金をもとに研究助成や予防啓発パンフレットの発刊など循環器病制圧のための諸事業に役立てる。

関係各位の温かいご厚志に心から謝意を申し上げる次第である。



循環器病研究振興財団へのご寄付

平成10年4月から平成11年9月までにご寄付を頂いた方々のご芳名を記し、心より厚くお礼申し上げます。

小林 一雄	東住吉区	廣岡弥壽夫	箕面市	川上 清	吹田市
稲葉 壽一	豊中市	鶴 喜久	箕面市	木村 孝雄	一宮市
富田 雄輔	生駒郡	西村 幸一	宇治市	川上 興二	吹田市
田村寛次郎	西宮市	赤松 弘	門真市	山口 岳人	枚方市
小路 正雄	摂津市	木下 輝代	箕面市	石田 隆一	尼崎市
浅田 友信	住吉区	秋田 真志	吹田市	山田 廣司	豊中市
角谷 廣志	寝屋川市	石井 保治	箕面市	橋本 尚	垂水区
木村 俊夫	福井県	野口 勝也	箕面市	高坂 尚男	枚方市
宮越 外次	旭川市	谷 佳憲	宇治市	北波 道雄	城東区
長棟 一展	赤穂市	上村 広範	茨木市	小路卯一郎	箕面市
小村 元伺	吹田市	水谷 務	交野市	金子八重子	茅ヶ崎市
清水 五朗	吹田市	古瀬 克美	高槻市	須賀玄一郎	東淀川区
田中 保子	豊中市	高山 保	伊丹市	江口 満典	阿倍野区
新保 誠敏	吹田市	森下 美樹	和歌山市	平子 強	高槻市
金築 孝一	吹田市				

(敬称略・順不同)

「知っておきたい循環器病あれこれ」 パンフレット紹介

当財団は、設立10周年記念事業として標題のパンフレットをシリーズで刊行しています。

これは、循環器病の予防方法その他の最新情報を一般の方々も十分理解して頂けるようかみくだいて紹介するものです。

当初計画では、1年間、毎月1号、12号まで、各号1万部と予定し、主として国立循環器病センターの医師が各専門分野を分担執筆し、読売テレビほか主催のチャリティゴルフにより寄せられた基金等をもとに財団が発行し、病院、保健センター、健康保険組合などに配布してきました。大変好評で、既に在庫切れの号もあり、また続刊の希望が多く寄せられています。

そこで、第2次計画として平成11年度ではさらに19号まで発刊を予定しています。

なお、既刊分の内容は国立循環器病センター「循環器病情報サービス」のインターネットホームページ (<http://www.ncvc.go.jp/cvdinfo/cvdino.htm>)でもご覧になれます。



	号	タイトル	著者
既刊	第1号	酒、たばこと循環器病	河野雄平
	第2号	脳卒中が起これば	峰松一夫
	第3号	肥満よさようならの医学	洪秀樹
	第4号	高血圧とのおつきあい	瀧下修一
	第5号	心筋梗塞、狭心症とその治療	野々木宏
	第6号	怖い不整脈とこわくない不整脈	鎌倉史郎
	第7号	心不全—その症状と治し方	宮武邦夫
	第8号	心筋症とはどんな病気	山岸正和
	第9号	心臓移植のあらまし	中谷武嗣
	第10号	大きな血管の病気	松尾汎
	第11号	予備軍合わせて1370万人の糖尿病(その1)	原納優
	第12号	予備軍合わせて1370万人の糖尿病(その2)	原納優
予定	第13号	心臓のリハビリテーション	後藤葉一
	第14号	高脂血症	都島基夫
	第15号	脳卒中とは	山口武典
	第16号	食事で防ぐ循環器病	小松良哉
	第17号	ストレスと循環器病	築山久一郎
	第18号	運動と循環器病	内藤義彦
	第19号	たばこのやめ方	上島弘嗣



第1号の1頁

編集後記

- 2000年まであと100日を切った。今後21世紀の循環器病をめぐる研究や技術革新はどのような展開になるのであろうか。その重要な視点である細胞の情報伝達系と循環器病の関係について松尾先生に分かりやすい言葉での解説をお願いした。
- 今年の循環器病関連の問題のハイライトは心臓移植の実施だろう。今後の話題等について手術に当たられた北村先生に寄稿をお願いした。

発行

財団法人循環器病研究振興財団

〒565-8565

大阪府吹田市藤白台5丁目7番1号

電話 06-6872-0010

FAX 06-6872-0009